

- 基 →二界の業生へ意界・意識界(12)
- 命 根↓水蓮の水の如し(12)
- 空 ↓色の区別(13)
- 生 ↓ (13)
- 輕快性↓不遲鈍性(14)
- 柔軟性↓不堅固性(14)
- 適業性↓身業の隨順性(14)
- 身 表↓心生の風大の変化・色柱は根拠(15)
- 語 表↓心による地大の変化(16)

(該當偶ナン)

このA表は Saccasankhepa の最初にみられる色分別でこれは清淨道論 pp. 448~9 を継承したものの略解は Saccasankhepa の偈の内容による。

- 註① Attasālinī (Asl) p. 66, Abhidhammathasāṅgaha (Abhs) p. 13
- ② Asl. p. 249 (31)
- ③ Visuddhimagga (vism) p. 614
- ④ Vism. p. 450~, Abhs. p. 28~, Abhs. p. 29, A(table)
- ⑤ Saccasankhepa (18)
- ⑥ ibid (19)
- ⑦ A(table)
- ⑧ Abhs. p. 28
- ⑨ Vism. p. 615
- ⑩ Abhs. p. 30
- ⑪ Vism. p. 448

### 発智・大毘婆沙論における

### 世第一法説の一考察

梶田善夫

発智論に於ける項目の中には、諸部派間に於いて見解を種々異にしたものを引用していることは、それに続く註釈書大毘婆沙論から知られる。此等の異なる見解を考察することは、発智論を取り巻く時代の思想状況を説明することになるだけでなく、後

代での大毘婆沙論の教学的役割りを探ることに有益な示唆を与えてくれるものと考えられる。本稿は、それ等の中で世第一法説とそれを巡る問題を課題として扱ひ、有部阿毘達磨思想史開明の指針の一つにしようとするものである。

説一切有部は、修行道の体系を先ず順解脱分の五停心・別相念住・総相念住の三賢・順決択分の煖・頂・忍・世第一法の四善根、そして見道・修道の預流・一來・不還・阿羅漢向の有学道、阿羅漢果の無学道へと修道位を展開させるのであるが、今問題とする世第一法 (laukika-agra-dharma) は、正性離生 (samyaktva-niyama) と言われ、有漏なる異生位から無漏なる聖位に入る世界超越に於ける人間存在の最終的場面である。それについて諸部派間に種々異なる見解の交わられているのが見られる。発智論は、次の一文中に異説を出す。

①云何世第一法。答若心所法。為等無間。入正性離生。是謂世第一法。有作是説。若五根為等無間。入正性離生。是謂世第一法。」

註釈書なる大毘婆沙論に於いては、この異説を舊阿毘達磨論者の説とする。付加された理由として、分別論者の以下の見解を破る為に説かれたと説明している。

「謂分別論者執三信等五根唯は無漏。一切異生悉不成就。」  
先の異説の舊阿毘達磨論者説が、

「為遮彼(分別論者)意。故舊阿毘達磨者説。世第一法以三根為自性。世第一法在異生身。故知五根亦通有漏異生。」  
として分別論者と対立していたことが、この内容から伺うことができる。

この分別論者の説については、異部宗輪論中の説一切有部が「世間信根有り」とするのに対立した大衆部・化地部の「世間信根無し」に同ずるものと解釈できるが、発智論の異説、つまり大毘婆沙論中の舊阿毘達磨論者の説に相当するものとして経部と犢子部の説を大毘婆沙論から挙げる事ができる。

②或説。此是經部所説。謂經部師。亦為遮遺分別論者。如前所執。故作是言。世第一法五根為自性。非唯爾所。」

③有説。此是犢子部宗。彼部師執世第一法信等五根以為自性。唯此五根是自性善。余雜此故。亦得善名。由此五根建立一切賢聖差別。不由餘根。」

この二説は、分別論者との經典理解の相違から対立した見解となったことが大毘婆沙論から読みとれる。

又、旧訳毘婆沙論を補ってみると分別論者と応理論者の対立が大毘婆沙論で明確になるが、分別論者が、

④「分別論者作如是言。此中根名説所依處。不説根體。於我何違。」  
とするのに対して、応理論者が、

⑤「彼（分別論者）此二經根聲不異。一謂根體。一謂所依。非所極成。是自妄執。故定應許信等五根亦通有漏。」

⑥「彼經一向說無漏者。所以者何。依無漏根。建立聖者有差別二故。」としており、ここでも対立する内容の一端を読みとることができる。

以上、発智論の異説は、大毘婆沙論・舊訳毘婆沙論から、舊阿毘達磨者と呼ばれ、応理論者・經部・犢子部と呼ばれていた。発智論本論が唯一の心心所法なる精神的作用上、正性離生に入るとするのに対して、肉体的能力なる信・勤・念・定・慧の五根に依るとして大きな相違を見せるのである。しかし、註釈書大毘婆沙論に正統有部と解釈されている応理論者が発智論の異説側に立っていることは分別論者との関係上、問題を引き起こすことになる。

次に、その様な関係が問題となる二例をあげることとする。第一例は、木村泰賢博士の体系付けで言えば、「第一編雜蘊、第三章個體の流轉と還滅とに關する論究、第二十四節解脫心の本性に就て、並びに心性本淨論に対する批評」に於いてである。先ず發智論のこの個體の立論理由として、大毘婆沙論は、分別論者の「心本性清淨客塵煩惱所染汚故相不清淨」とする心性本淨説を破する為に説いたとしている。続く發智本論の文中、

⑦「如世尊說三心解脫貪瞋癡。何等心得三解脫。有貪瞋癡心耶。離貪瞋癡心耶。答離貪瞋癡心得三解脫。……有作是説。貪瞋癡相應心得三解脫。……」

この異説について大毘婆沙論は分別論者として説明するのであるが、しかしこの貪瞋癡は六隨眼中の煩惱であるから、例えば雜阿毘曇心論卷四に、隨眠について

⑧「問彼使為心相應為不相應。此何所疑。二師異説故。毘婆闍婆提。欲令不相應。育多婆提。欲令相應。」

と説くところから、毘婆闍婆提 (Vibhaya-vadin) なる分別論者は發智論本論と同説となり、育多婆提 (Yukta-vadin) なる応理論者は異説と同一になるのである。

又、この分別論者の説は、大毘婆沙論中に於いて、  
⑨「分別論者又說隨眠是纏種子。隨眠自性心不相應。諸纏自性心不相應。纏從隨眠生。」

とすることは、異部宗輪論では、化地部・大眾部説に同ずるが、説一切有部は、「一切の隨眠は皆是れ心所なり。心と相應す。」とするとところから、応理論者と同じく發智論中の異説側に立つものとなるのである。

第二例は、「第一編、第四章、第十三節涅槃と學・無學・非二學との關係に就て」に於ける問題である。これはすでに發智・八健度論の違いの一つとして八健度論の因

訳者や西義雄博士が論文「有部宗内に於ける發智系・非發智系等の諸種の學説及び學術の研究」で指摘され、河村孝照博士が著書「阿毘達磨論書の資料的研究」で問題として取り上げておられる。發智本論に於いて、

⑩「涅槃當言學耶無學耶非學非無學耶。答涅槃應言非學非無學。有作是説。涅槃當言學有無學有非學非無學。……」

としているが、大毘婆沙論はこの異説を犢子部と説明している。以下に続く論争を識身足論の補特伽羅羅「三學と補特伽羅」と重ねて考察した場合、特相の上で多くの共通点を見せるのである。識身足論の補特伽羅論者は三學補特伽羅を許して、學法無學法非學非無學法の存在も認めるのに対して、性空論者は「諸法性有等有。由二相想二假説有情。」とするが、分別論者の二説を分けない立場の大毘婆沙論別説・八健度論説に従って、性空論者と分別論者、應理論者と補特伽羅論者とを重ねて理解した場合、結論だけに入れ換えられていることになり、それ以外は都合をおこなっているのである。さらに続けて言えば、大毘婆沙論に出てくる西方諸師の九果説が、雜阿毘曇心論卷九に於いては應理論者であることから、正統有部とは言えないものを残している。

次に、この二例に依って示された分別論者側の問題に対して、時代は下がるが、きわめて示唆になる説明が世親の仏性論中「小乘に於ける仏性の有無」の分別論者と説一切有部についての中に見られるのである。

⑪「小乘諸部。解執不同。若依分別部説。一切凡聖衆生。並以空為其本。所以凡聖衆生。皆從空出故。空是仏性。仏性者即涅槃。若依毘曇薩婆多等諸部説者。則一切衆生。無有性得仏性。但有修得仏性。」

ここに引用されている分別部説は、第一例の心性本淨説と共通する説と言える。又、ここに引用されている薩婆多とは、大毘婆沙論の世第一法の説明の中、

⑫「説現世有作用者。唯有二心非説一切説一切実有多心。未來世中有二多品類。」

と説明する箇所や、又他の個所の説明、

⑬「願定実有過去未來。現在能修未來善法。謂現在世勝善為因。引起未來諸善法得。……現在唯有二刹那未來修無量刹那。現在或唯有二有漏心心所法。未來修三有漏無漏心心所法。或現在唯有二無漏心心所法。未來修無漏有漏心心所法。」

又、分別論者に対する論争で、

⑭「謂或有説。無未來修。或有説。聖道是無為。或有説。聖道是一。為止彼意。願有未來修。亦願聖道是有為而非一。故作三斯論。」

とするとところから、大毘婆沙論に於ける説一切有部の教學的立場が明確に理解され得

ることになる。

又、八健度論では、旧訳毘婆沙論と同じく世第一法について、

「云何世間第一法。答曰。諸心、心法次第越次取證。此謂世間第一法。……」

として、心、心法が複数で表現されていることは、異部宗輪論の説一切有部説や発智本論の

⑮「世第一法當レ言二一心多心一耶。答レ言二一心。」

の世第一法唯一心の根本問題にふれることになる。又補特伽羅非前後二心俱生説にも落ちることとなる。この様な他の例は、拙稿の参照を請う。

○

以上、世第一法説に出てくる問題を、諸部派との関係の中で考察したが、ここで提出した分別論者と応理論者との関係を新たな問題提示と受けとめて、有部阿毘達磨の歴史的側面と教法的側面の理解を深めるために、一指針ともなればと考えて事例に従った自己の見解の一端を披瀝した。又、さらには今後予想されうる浄土教の往生思想と正性離生の関連も考慮に入れるならば、尚別な場面での世第一法説の展開が期待できることにもなるだろう。

註① 大正27巻7b

② 大正27巻8b

③ 大正27巻8b

④ 大正27巻8b

⑤ 大正27巻8a

⑥ 大正27巻8a

⑦ 大正27巻14c

⑧ 大正28巻907b

⑨ 大正27巻313a

⑩ 大正27巻169a

⑪ 大正31巻787c

⑫ 大正27巻10b

⑬ 大正27巻551c

⑭ 大正27巻919a

⑮ 大正8巻71c

⑯ 大正27巻20c

⑰ 印度学仏教学研究三十巻第二号

「新旧両毘婆沙論に於ける一・二の相違点について」。

## 観徹と浄土曼荼羅

松永知海

観徹（一六五七—一七三二）は、円蓮社義管浄真阿と号し、鎌倉光明寺第五十八世となった江戸期浄土宗を代表する学僧の一人である。彼の名著『浄土三部経合讚』が簡潔明快に書かれ、後学の指針としてながく重要視されてきたことによっても、それは理解できるのである。

本稿では、そうした観徹と浄土曼荼羅とのかわりについて述べてみたい。

かれの伝記は、没後八年して著わされた『現証往生伝』（以下、伝記と略す）に詳しい。彼は明暦三年に京都で生まれた。十五歳の時関東に遊学して、諸宗の蹟に達し、雲臥に招かれて小金東漸寺の学頭となる。正徳二年（五五歳）に江戸崎大念寺、享保五年（六三歳）に水戸常福寺、同十一年（六九歳）鎌倉光明寺へと檀林を歴住し、同十六年（七四歳）に没する。伝記にはこの間、日課念仏をよく修し、盛年の頃より日課念仏一万遍、怠ることがない、と記されている。

ところで、彼と浄土曼荼羅を結びつけるのは、伝記に、

同十六年ノ夏夏ナリ智光清海ノ二変相ノ合讚ヲ講ゼリ

とある記述だけである。この二変相の合讚はすでに正徳二年に『智光清海曼荼羅合讚』二巻として上梓されているから、それをもとに講じたことがわかる。しかしなぜ亡なる年に二変相合讚を講じたのであろうか。その手がかりとして、伝記につきぎの文がある。

衆ニ対シテ云ク。我レ今年ハ西帰ノ年ナリ。斯終身ノ結講ナリ、トテ毎日臨終正念、同生極楽ト回願セシメラル。初春以來念頃ナル人ニハ斯云テ永訣ヲ取レリ。預メ命期ヲ知ルニヤト後ニ思ヒ合スルコト多シ。

これにより、観徹はその死期が近づいたことを知って、終身の結講としてこの二変相を講じたことが記されている。

○

『国書総目録』著者別索引によれば、観徹の著書は九部十九巻あったことがわかる。そこに浄土三部経関係・五重関係・戒関係の著書とならんで、『智光清海二曼荼羅合讚』二巻がある。それら二曼荼羅に当麻曼荼羅を加えて浄土三曼荼羅というが、なぜ観徹は智光と清海との曼荼羅に限って解説を加えたのであろうか。

これについて『智光清海二曼荼羅合讚』の自跋につきぎのようにある。